

問題 5. 卵巣癌肉腫

症例：61 歳、女性。腹部膨満。

検体（採取法）：右卵巣腫瘍（腫瘍捺印）

染色：パパニコロウ染色

問題：正しいものに○、間違っているものに×を下さい。（VS：バーチャルスライド）

1. VS では、壊死性背景がみられる。 ○
2. VS では、上皮性と間葉系の異型細胞がみられる。 ○
3. ホルモン産生性腫瘍である。 ×
4. TP53 の遺伝子変異が高率にみられる。 ○

解説

61 歳、女性の卵巣腫瘍に発生した腫瘍の鑑別診断である。VS では、壊死の強い背景に、多数の重積性細胞集塊や散在性の細胞が認められる。重積性集塊には、核クロマチンの増量が著しい大型細胞が密に結合しており、上皮性の悪性細胞を思わせる（図 1）。一方で、やや核クロマチンの増量に乏しい紡錘形細胞や奇怪な大型細胞も散見し、これらは間葉系の異型細胞と考えられる（図 2）。これらから、卵巣原発癌肉腫が推定される。組織標本では、腺腔を形成する腺癌の成分の周囲には大型異型細胞をびまん性に認める（図 3）。また、軟骨に分化する異型細胞の増生も認められ（図 4）、異所性癌肉腫と考えられる。

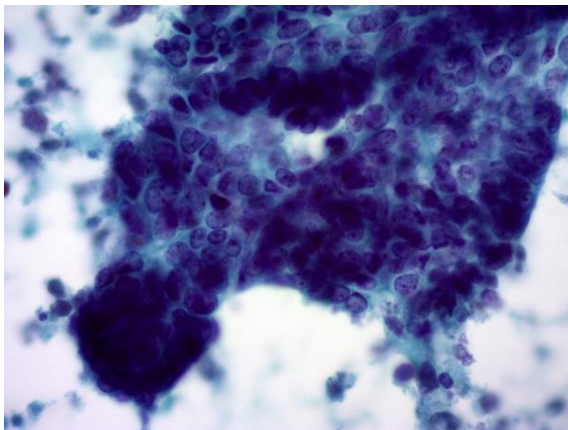


図 1

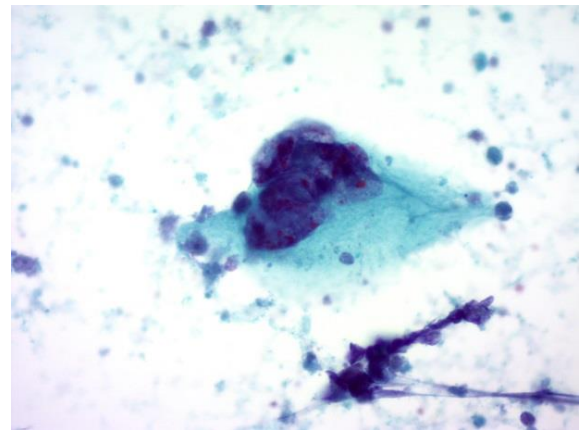


図 2

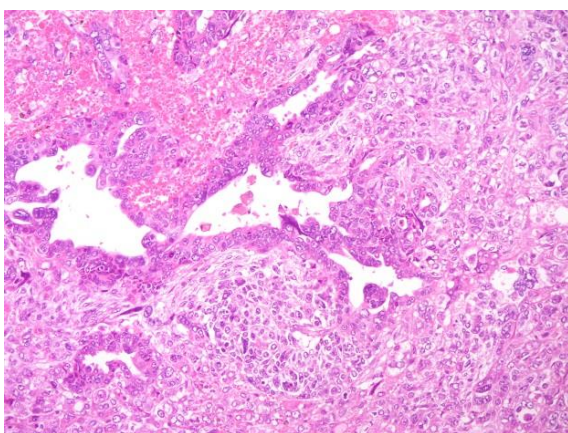


図 3

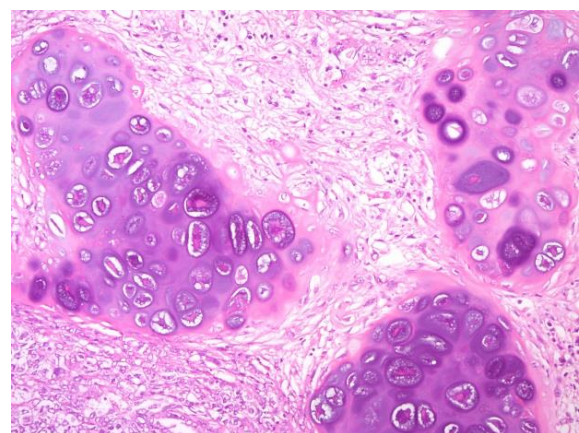


図 4

卵巣原発癌肉腫は卵巣癌の約 2%に認められる。平均年齢は 64-66 歳であり、臨床病期が進んだ状態でみつかるとも多く、予後不良である。組織学的には悪性度の高い癌の成分と肉腫の成分が混在して認められる。癌の成分は高異型度漿液性癌のことが多いが、類内膜腺癌など他の組織型のこともある。肉腫成分にもさまざまなものがみられるが、軟骨肉腫、骨肉腫、横紋筋肉腫など異所性成分も多い。p53 の遺伝子変異が認められ、肉腫成分も上皮由来であることがわかっている。最終診断は卵巣癌肉腫である。